笑顔で真っ白になりたい

中野 信哉

2015 年 3 月末の定年退職後、中東 Oman で生活しています。『宿題』を果たす機会を得て、「人生の卒業試験」に取り組めるようになり、ワクワクしています。

1　宿題を果たす時がきた

H元年から３年間、家族でアマゾンに赴任し、想像を絶する苦しみを味わった。周囲の支えにお礼を言ったら、「次につなげていってほしい」と返された。このときから、私たち夫婦には「次につなげる」という『宿題』が始まった。

退職後、在外教育施設シニア派遣にその機会を得て、中東 Oman の首都 Muscat にある在外教育施設「オマーン補習授業校」に夫婦で派遣された。派遣先を選べないダーツの旅に、未知の世界を感じ、ワクワクしている。

四度目の成人式を元気に迎え、「人生の卒業試験」を気持ちよくクリアしたい。そのためには、惰性的なぬるま湯生活から抜け出し、互いの存在を再確認していくことが必要である。ここは、まさに希望の地である。

＜在外教育施設とは？＞

海外で生活する日本人子女のための在外教育施設には、日本人学校と補習授業校がある。現地日本人会等が設置運営し、文部科学省が教員を派遣している。

日本人学校は、国内と同等の教育を週５日行う全日制で、50 カ国・88 校で約２万人が学んでいる。

補習授業校は、現地校やインターナショナルスクール等に通学する日本人子女に対し土曜日や放課後などに日本語で授業を行い、55 カ国・202 校で約１万７千人が学んでいる。ほとんど土曜日だけだが、授業日が週５日の準全日制補習授業校（世界で４校：オマーン補習授業校はその中の 1 校）もある。

2　宿題のきっかけ１「未知の世界に憧れた」

○友だちをつくる喜びを知った

父の仕事の都合で、小学校時代に３回の転校があり、冬の北陸にも行った。気候や生活習慣の違いにびっくりしたり、言葉の違いに戸惑って独りぼっちになったりすることもあったが、それを解消するには自分から輪の中に入っていき、友だちをつくっていくしかなかった。

しかし、転校のたびにそれを繰り返していくうちに、新たな友だちをつくることに楽しみも覚えていった。

○未知の世界に憧れた

子どもの頃、遊び道具は少なく、うちにいるときはしかたなく？本を読むことが多かった。しかし、知らぬ間に冒険物語や旅行記に引き込まれ、主人公になったようなワクワク感を味わうのが好きになっていった。

冒険物語や旅行記が、私を未知の世界へ駆り立てていったように思う。

○夢に向かって踏み出しかけた

高校時代に下宿し、家を離れていろんな人と出会うことにさらなる興味を覚え、下宿の友人と外国旅行を夢見た。「大学に進んだら、自転車で外国旅行をしよう。アメリカ大陸横断か、ヨーロッパ大陸一周がいいな。」と。

勉強はそっちのけで、毎晩のように地図帳を眺めながら未だ見ぬ国へ想いを馳せていった。自転車旅行の練習のため、熊本－八代間を自転車で何度も行き来した。

しかし、友人とは別々の進路へ進み、私はずっと陸上競技を続けたので、学生時代には実現できなかった。そのうち私は就職して、その夢は立ち消えになっていった。

○夢に再び火をつけた日本人学校

弟が、学生時代に一人でネパールやペルーを旅行した。私は「やはり行っておくべきだった」と後悔したが、すでに教職に就いていて、そんな余裕はなかった。

ところが、思わぬところから道が開けてきた。弟がペルーへ行く前に、私が大学時代の友人にたまたま連絡したところ、ちょうどメキシコの日本人学校に赴任していることがわかり、弟は立ち寄ってきた。

このことから、高校時代の夢が再燃し始めた。日本人学校という制度を知り、「あいつに行けたのなら、オレにも行けないはずはない。」という思いが頭をもたげてきた。

3　宿題のきっかけ２「夢が近づいた」

○日本人学校への関門

子どもの頃からの憧れが、高校時代に具体化しかけたのに、いつの間にかしぼんでいったという無念さが私の中に残っていた。だから、「夢が実現できる」というチャンスに出会ったとき、これだと思った。

家族同伴が原則だった。妻は「どこへでもついて行く」と言ってくれたが、子どもが小さかったので下の子が３才になるまで待つことにした。

２年後、「さあ、解禁！」と喜び勇んで応募したが、ダメだった。その次の年もダメだった。

私たちの計画に反対だった私の母は、落ちる度にニコニコ喜んだ。妻の母は表立って反対しなかったが、赴任後に届いた手紙には「あなた方の飛び立った空を仰いでは、涙を拭っている。」と書かれていた。

２年続けてダメだったので、私は落ち込んでしまった。しかし、どうしても夢を捨てきれなかった。「こんなに意欲があるのに、なぜ採用されないのか？力がないのか？」と悩んだが、落ちた理由は誰も教えてくれなかった。自分で考えるしかなかった。

・旅行気分でいたのではないだろうか？
・何のために希望したのだろうか？
・私は何ができるのだろうか？
・私に何が求められているのだろうか？

と、整理していくうちに自分の甘さに気づいた。

そこで、新たな気持ちで３回目の選考に挑戦した。自分の気持ちを前向きに持続していくことは、これが限界かもしれないというギリギリの思いだった。

その頃、我が家は結婚８年目で、電化製品や車の調子が悪くなっていた。赴任すれば、３年間留守になる。家財道具を新調すれば、無駄になる。だから、洗濯は手洗い、掃除はほうきと、妻には辛抱してもらった。車は、なんとか１年間だけ走れるような車を…と、探した。

面接では、家族の同意の有無や外国での危険に対する認識等も聞かれた。「妻子は私と一緒に行くと言っている。家族がバラバラになることはとうてい考えられない。」、「日本にいても、死ぬ時は死ぬ。外国に行って死ぬようなことがあっても後悔しないし、文句も言わない。（死んでしまったら文句も言えないのだが）そもそも日本は物の豊かさと心の豊かさが反比例し、心が貧しくなってきている。」と啖呵を切ってしまった。

これが、アマゾンへとつながったのかもしれない。

4　宿題のきっかけ３「夢が実現した」

長年の粘りが報われたのか、３回目でやっと派遣が決まった。日本人学校に希望を持ってから、５年目の 34 才の時だった。外国へ行くことへ具体的な憧れを抱いた高校時代から数えれば 17～8 年目、まさに夢のような話だった。

○赴任の準備

H元年１月、赴任先が『ナナオス日本人学校』だと聞か

された。どこにあるのか知らなかったが、辞退したら二度と行けないようだったので、「はい行きます」と即答した。
　その夜、やっと決定した喜びと赴任地がどのような所だろうという不安とが入り混じった。地図帳にはナナオスという地名は見つからないし、似ているマナウスはアマゾン川の中流だし、「いったい、自分はどこへ行くのだろう？」と不安に襲われた。
　後から、赴任先がブラジルのアマゾン川中流にある『マナオス日本人学校』だとわかった。（注：都市名はマナウス、学校名は旧マナオス・現マナウス日本人学校）
　１月末に筑波で２週間の派遣前研修会があり、先に勤務されていた先輩の先生から学校や現地での生活について詳しく話を聞くことができた。具体的な話を聞いて様子がわかり安心したが、不安も増した。
　文部省の係から、黄熱病、破傷風、A型肝炎、B型肝炎、マラリアなどに対する予防対策が必要だと説明された。
　予防接種がすべて完了するのには６～８ヵ月かかると聞いて、「出発までには時間がない。なぜ早く教えてくれないのか。このままでは不安だ。」と抗議すると、「そんなことは自分で準備しておくものだ。」と冷たく突き放されてしまった。
　しかたなく博多検疫所まで行って黄熱病の予防接種を受け、八代の熊本労災病院でA型肝炎の予防接種（γーグロビリン）を受けた。γーグロビリンははっきりした効果があるかどうかわからず、しかも効力はあっても３ヵ月程度ということだった。「じゃあ、どうすればいいのか？」に、病院の先生から「幸運を祈る！」と笑顔で激励され、大きな不安を抱いたままでの出発となった。
　赴任地での生活道具は、すべて前任者から譲り受けた。「どんな物がブラジルで揃うのか？」には、「文句を言わなければ、何でもある。日本製の物に拘らず、３年間キャンプをする覚悟があればいい。」との返事だった。
　おとなと違って子どもは成長が早いので、衣類等の身の回りの必需品は、段階を追ったサイズを３年分準備した。赤道直下なため夏物がたくさん必要だったが、日本の寒い時期にはほとんど手に入らなかった。子どもの学用品は、小１～３までを２人分ずつ準備した。
　借家住まいだったので、『ブラジルに持って行く』、『実家に預ける』、『処分する』に分けて準備や整理をした。
　日本での勤務は３月末までで出発は４月６日だったので数日間は徹夜状態になり、４月始めの送別会では体調不良でほとんど飲めず食えずだった。当分の間、刺身とはお別れだったのに…。

５　宿題のきっかけ４「マナウスでの体験 Saude（サウージ）」

○日本との時差１３時間

　成田でヴァリグ機に乗った途端、息子が「おしっこ」と言った。客室乗務員を呼んだがポルトガル語がわからずジェスチャーで伝えたら、すぐに連れて行ってくれた。離陸直後、息子が座席前のテーブルを倒しておでこを打ってしまった。すぐさっきの客室乗務員に、おでこを「あいたぁー」とたたいて見せたら、すぐ氷を持ってきてくれた。前途多難を思わせるような出発だった。
　その後、ロサンゼルス−リオ・デ・ジャネイロ−マナウスと、地球の反対側まで飛行機を乗り継いで行った。機内では、食事が済むと暗くなって眠る、目が覚める頃には次の食事が出てくるの繰り返しで、ブロイラー状態だった。楽しい旅の秘訣は、「腹八分目」だと悟った。
　リオを過ぎて夜明けに出会い、それから３時間後、私たち一行の中で「わあーっ！アマゾン川だ」という歓声が上がり、ジャングル＆川という景色に出会った。

眼下に川＆ジャングルが延々と続いた

　「どれがアマゾン川？」「あれかな？これかな？」という状態が 30 分以上も続き、やっとマナウスに到着した。結局、すべてアマゾン川の支流だった。
　マナウスまで約 32 時間かかった長旅の疲れとムっとするような熱帯の熱気でフラフラの私たちをマナオス日本人学校の児童生徒、保護者、職員の皆さんが熱く熱く歓迎してくれ、私たちの使命感を強く再認識させてくれた。

マナウス空港到着後、熱い歓迎を受けた

○熱帯マナウス

　マナウスは南緯３度、アマゾン川河口ベレンから2000km 遡った中流にあり、首都ブラジリアから2500km 飛行機で３時間、周囲はジャングルとアマゾン川に囲まれ陸路で他の都市への移動が困難なため『陸の孤島』と呼ばれていた。
　開高健は、「ジャングルの中に突然現れる都会」と表現していた。

マナウスはアマゾン川中流

　典型的な熱帯雨林気候で、12 月～５月の雨季には川の水位が 10mも上がるほど雨量が多く、気温 35℃以上、湿度 80%以上の高温多湿の厳しい日が続く。
　傘が役に立たないほど雨が激しく降るので、雨の時は外へ出ない方がいい。６月～11 月の乾季は、雨季に比べて雨量が少ないだけのことである。
梅雨から夏にかけての「暑さ＋蒸し蒸し感」が一年中続く感じで、植物の成育状態から太陽光線の量は日本の５倍だと言われた。日本で一番強い日焼け止めもあまり効果がない。暑いからとシャツを着ずに裸でいると、凄まじい日焼けで苦しむことになる。